

教育随想

ふれあい



三年生を担任して

沢田 咲子

ある日突然、S子が就職したいと言
い出してきた。『全員進学』を目標に
勉強させてきたやさきのことである。

この子は、社交性に富み、学校では
大変明るい子であったが、父親が違
うに貧しいということもあって、進
学か就職か迷っていたらしい。それは、
グループ日記で読んだことがあった。

「私は、今のお父さんとはどうして
も合わない。家に帰るとけんかばかり
している。夕方、学校から帰る時間
になると、なんかしら重たい石が頭
からかかってくるようで、足が家
に向かないのだ。こんな状態では
今の私には、進学は考えられない」と。
その後、二、三度話し合ったが、意
志は堅く就職した。その彼女から、
先輩たちにかわいがられ、張り切っ
てやっている

いううれしい便りがあった。

夜半の電話は、遠くの私立高へ行
ったKからである。眠い目をこすり
ながら「どうしたの？今ごろ」と
言うとき、「だって、つまんなくな
ってえ」である。相変わらず甘た
れた声だ。近くに高校がありなが
らなぜ遠くのほうへ……

K子とI子は「後悔はしません」と
看護婦への道を選んだ。その彼女
たちを旧友数人と、夏休みも押し
詰まったある日訪問した。「自分
の選んだ道なのだから、どんなこ
とがあっても、歯をくいしばって
がんばるのよ」とホームで見送っ
てから五ヵ月、ポンポンと飛び出
す東京弁を聞きながら、この子
たちの進路はこれでよかつたん
だろう

かと。

現代では、高校卒の資格は義務教
育並みだ。経済の許す限り、どんな
子でも進学させたいと思うのは、
ひとり親だけではあるまい。それ
ゆえに、寝ても起きても子供たち
の進路のことが、頭から離れな
かった。

「先生、おれ、将来何になっ
ていいのかわからないんだ」と。
考えてみれば弱冠十五歳、自分
が何に向いているのか、どの道に
進むのがいいのか、男子一生の
仕事に足る道は何かなどわか
るはずがない。かといって、三
年間随分細かに観察してきた
つもりでも、この子に悔いのな
い一生を、と思うとよけいその
難しさが感じられる。

実業高校か、普通高校か、でも
彼らは悩む。まさに人生第一の
岐路である。彼らは彼らなりに
自己分析し、「おれは文科系だ」
、「おれは理数系だ」と言
って進むものの、中学校の段
階では、そんなに容易に進路の
決定ができるものでもあるまい。
いつでもどこで啓発され秘
められた可能性が発揮される
ものか、これも予測はできない
であろう。

「おれは野球がやりたいんだ。
だからその名の通った高校に行
きたいんだ」動機はきわめて
単純である。中には、「先生、
おれどこでもいいんだ。本当
は就職したいんだが、親が
進学しろと

いうから行くんだ」という依
存型もある程度、学校のラン
クがあるといえ、サラリー
マンの家庭では農業高校
へもやれないだろう。か
と言って、子供たちの希
望どおりの受験は現実と
しては困難なことだ。

また「先生にお任せし
ます」というのもある。し
かし、これは一番困る。
この子の将来が、私の一
言で決まるとしたら、こ
れほど重大なことはい
ない。布団の上げ降ろし
にも、大根を刻むのにも、
四十二人の子供たちの
進路を思うと胸の痛む思
いだった。

幸い、本校の校長先生は、
進路指導において、他の
追隨を許さぬほど精進
している。その校長先生
自らの細かい資料分析や、
学年主任の温かい助言、
ベテラン先生がたの援
助等があった。それぞれ
希望する高校に全員合
格した。しかし、ふと見
た新聞の論壇「このど
うにもならぬ現実」と
題した記事の中には、
「実業高校卒であるが
ための差別待遇を憂え、
大学進学を目指して新
聞配達をしながら予
備校へ通っている」と
いう投書のこと取り上
げられていた。

これを目にしたとき、
実業高校に進んだ生徒
たちの将来について、
不安の情がわいてくる
のをどうすることも
できなかった。

(いわき市立錦中学校教諭)